

令和二年度 伊達市民憲章 作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて、平成二十九年度から実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて五百三十一名の応募がありました。生涯を通して学び続けられる教育環境や、地域の伝統文化を引き継いでいくことへの思いなど、自らの体験をもとにしてまっすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くのの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行

1

小学生の部

5

【最優秀賞】

受けつぐ文化

保原小学校 五年

ダッフィー佐藤 エイデン志恩

【優秀賞】

生涯読書

掛田小学校 五年 佐藤 茉波

みんな、天蚕って知ってる？

掛田小学校 六年 小林はるの

【優良賞】

歴史をつなぐ

伊達小学校 六年 宍戸 美香

梁川城への思い

梁川小学校 五年 岡崎 心優

読書を通して心を豊かに

図書館へ行こう

梁川小学校 六年 遠藤 蒼依

伊達小学校 五年 遠藤 和奏

【佳作】

地域の伝統を守る活動を

未来へ向けて学ぶこと

身近な伊達を学ぶ

学びあう町に

小国小学校 六年 狗飼 梨央

堰本小学校 五年 橘 太一

上保原小学校 六年 渡邊 友悠

月館学園小学校 六年 高木 梨央南

中学生の部

【最優秀賞】

学習を楽習へ

霊山中学校 三年 須田 玲菜

【優秀賞】

月館町と未来を背負う私たち

月館学園中学校 二年 齋藤 りおん

恵まれた町の中で

梁川中学校 三年 橘内 優菜

【優良賞】

町の文化を広めるために

霊山中学校 一年 三浦 天寧

今をつないだ過去と未来

月舘学園中学校 一年 熊坂 栄那

私達が受け継ぐ

月舘学園中学校 三年 笹原 琉愛

音楽を楽しむ、音楽でつながる

伊達中学校 三年 八巻 愛香

【佳作】

私達で築く新しい伊達市

桃陵中学校 三年 齋藤 彩音

昔からの文化

松陽中学校 三年 遠藤 蒼斗

未来へ繋ぐ「文化」と「絆」

桃陵中学校 二年 引地美乃梨

文化を大切に

梁川中学校 一年 佐藤 百夏

講評

審査委員長 高野 保夫

伊達市民憲章

34

32

小学生の部



最優秀賞

受けつぐ文化

保原小学校 五年 ダッフィー佐藤 エイデン志恩

ぼくがアメリカに住んでいた時は、毎年、夏になると地元で行っていた日本の祭りに行つて、太鼓のパフォーマンスを見ていました。辺りに音が響き渡り、すごく迫力があつたことを覚えています。そして四年前、アメリカから保原町へ引っこしてきて、初めて保原町の太鼓祭りを見ました。沢山の山車が出ていて、クラスの友達がその山車を引いていたり、太鼓をたたいていたりして、楽しくお祭りに参加していました。そんなみんなの姿を見て、ぼくもぜひ、やってみたいと思いました。

二年生になった夏、念願の太鼓祭りに参加しました。祭りの日まで家の近くにある集会所を練習場にして、地域の方々に太鼓のたたき方をじっくりと教えていただきました。太鼓をたくバチの持ち方から始まり、たたくリズムの取り方、たたいているときの構えと本当にいろいろな事をおじさんや中学生のお兄さんたちがいてねいに教えてくださったので、最初は戸まどいながら太鼓をたたいていたぼくでしたが、練習を重ねるに連れ、自信を持つてたことができるようになってきました。そして、太鼓祭りの当日、あれほど練習したのに、太鼓

をたたきながら歩いているとリズムが狂ってしまい、何とかリズムを取ろうとすると歩くのを忘れてしまつてとてもむずかかったです。でも、そんなぼくを見に来てくれた家族や友達が声をかけてくれたり、手を振つてきたりして応援してくれたことがとても励みになりました。家族や友達、見物に来てくれた人達と一緒に祭りを作り上げていく感じがして、とてもうれしかったです。終わったときは手が痛くなつたけど、やり通すことができたので気持ちが良かったです。もつと練習をして、もつと上手になりたいと思いました。

アメリカでは、地域の人たちと力を合わせて伝統的なお祭りを行つたり、次の世代の人たちに教えたりすることは、そうめつたにはないとお父さんが言っていました。お父さんの話を聞いて、これが日本とアメリカの文化の違いなんだなと思いました。同時にぼくは、日本のこうした文化の受けつぎの方が、とても素敵だなと思いました。

今年の太鼓祭りは、中止になると聞いています。残念なことですが、来年の祭りに向けて少しずつ練習を重ねていきたいと思っています。そして、低学年の時のぼくが教わつたように、今度はぼくが下の学年の子に太鼓のたたき方を教えていきたいと思っています。上から下へ受けついでいくことが、「文化」なのかなと思うようになりました。子供も大人も一緒にたつて楽しむことができる文化。保原町に根付いている素敵な文化を、ぼくたち子供が大人になつても受けついでいけたら、数年後の保原町は今よりももつとみ力的な町になつていくと思います。

優秀賞

生涯読書

掛田小学校 五年 佐藤 茉波

「読書は心の栄養。」

よく耳にする言葉であり、読書好きな私にとっては、うなずける言葉だ。一方で、読書嫌いの人には、耳が痛い言葉であるかも知れない。では、なぜみんな読書をしているのだろうか。そして、読書でどんな栄養を心に取り入れているのだろうか。

そこで、読書について、家族にインタビューを試みた。母は、「知らない事を知り、ここではないどこかへ行くことができる手段である」とのこと。兄は、「気持ちを落ち着かせてくれるもの」と答えた。私にとってはどうだろう。心を動かしてくれるものであり、母と同じで、新しいことを学ぶことができる頭の体操にもなるものではないかと思う。

そして、私の家族は、普段どんな本を読んでいるかという点、母は仕事に関する本、兄は、歴史の本や小説、新聞とのこと。祖父母は、主に新聞を読んでいる。祖父は、活字を追いかけることが好きとのことである。私は、家や学校で、ミステリー小説やファンタジーの本をよく読んでいます。週七冊ぐらい読んでいる私も、祖父と同じく活字を追いかけることが好きなのだと思う。さらに暗号を解くことも私は好きである。

読書のジャンルは、はば広いということを改めて感じさせられた。

最近では、ネット環境が整備され、ユーチューブやゲーム、デジタルの本がある。インターネットけんさくも、とても便利なものだと思うし、デジタル化も自分を楽しませてくれる良いものだと実感している。

でも、紙の本には、紙の本の良さがある。私は、ページをめくる音が好きなので、本が好きである。また、ブルーライトがないから、目にやさしい。そして、学校の図書館や伊達市立図書館のように、たくさん本が並んでいる所も好きだ。広い所で、迷路のゴールを探すように、読みたい本を見つけるために歩く時間も良いと思っている。

低学年のころに好きだったのは、「まほうのなべ」という本。まほうのなべをもらった女の子のお母さんが、まほうのなべをとめるじゅもんを忘れるところにどきどきしたことを今でも覚えている。私の心の栄養の一つとして、この本が残っているのだなあと感じている。そして、祖母が言っていた「未来に生きる私達のために伝えるもの」としてある昔話」も、私の心の中にたくさん残っているものだ。

これから読みたい本は、アガサ・クリスティーの小説。『そして誰もいなくなった』がとてもおもしろかったから、他の本も読んでみたいと思っている。

こうやって、成長するごとに好きな本やジャンルを変えながらも、私はずっと読書が続けていくのだと思う。生涯を通して、読書をしていくことで、私の心にどれだけの栄養をたくわえることができるのか。楽しみながら読書し、豊かな心を育んでいきたいと思う。

みんな、天蚕って知ってる？

掛田小学校 六年 小林 はるの

私の祖母は、毎年六月になると、緑の蚕を持ってきます。名前は「天蚕」。天蚕は七センチメートル位の大きさの綺麗な緑色の蛾の幼虫です。山にあるクヌギやコナラの葉を食べて育ちます。葉は結構硬いのですが、私が驚くほど、いつも元気に食べています。

なぜ祖母が天蚕に興味を持ったのか、天蚕の関わりについて話を聞くと、きっかけは着物だったそうです。黄色から黄緑へと変化する糸が、天蚕からとった自然の色だと知り、その色の美しさに心を動かされたそうです。

祖母は、その後「霊山天蚕の会」に入り、活動を始めました。四月の終わりに、天蚕の食べる木に卵をつける「山つけ」という作業をします。天蚕の会では、ハウスの中のコナラなどの枝に袋に入れた卵をくくりつけます。ふ化すると、蚕のようにえさをあげなくても、天蚕は自分で葉を選んで食べるので、とても手間が省けるそうです。しかし天蚕の近くには、天敵がいっぱいいます。特に幼虫は、クモ、カエル、アリにおそわれる危険があり、これらが入らないように防ぐ必要があります。また、病気から守るためには、草刈りも大切な仕事となっているそうです。自然を相手に天敵や病気から守るには、様々な知恵や努力が必要なことを知りました。天蚕は七月の初めまでに、

四回も脱皮し五れい幼虫になった後で、サナギになりマユを作ります。ポニョポニョしていたマユが硬くなった頃に収穫です。卵をとるサナギ以外は、熱処理をしてサナギを殺します。マユを使って糸取りをするためです。とった糸で機織りをして着物、財布、名刺入れなど色々な商品にしていくそうです。サナギを殺してしまうのはとてもかわいそうですが、それも昔からの工夫の一つであることを知りました。

伊達市の道の駅でも、天蚕の商品を売っていることを教えてもらい、早速行ってみました。入って左側に天蚕コーナーがあり、イヤリング、名刺入れ、バック、ブローチ、ミニブーケ、におい袋、ネックレス。思ったより商品の種類が多くて驚きました。しかも、その商品に使われている一本一本の糸はつやがあって、とっても綺麗です。私は、お小遣いで買ったかったのですが、全部千円以上でもとても買えません。なぜこんなに高いのかを考えてみました。そして、卵から商品にするまでには多くの手間が必要で、大量生産ができないとても貴重な物だからだということに気が付きました。手間を掛けた品物の中には大事な物を入れたと思うし、誰もが大切に使うと思います。

祖母に蚕から糸をとる仕事は、千五百年前から行われていると聞きました。美しい物を大切に思い、手間を掛けて作り続けた人々がこの豊かな文化を守り続けていることに気付きました。そんな文化が続いている伊達市。今度は、私たちがこの素晴らしい文化を受けついでいこうと思います。

優良賞

歴史をつなぐ

伊達小学校 六年 宍戸 美香

私は、伊達町にある熱田神社の前に住んでいる。熱田神社は歴史が古く、縁結びの神様として地域の人々に親しまれてきた。お正月の七草参りをはじめとし、一年を通してさまざまな行事が行われている。幼い頃から神社の境内で遊び、まるで自分の家の庭状態だった私が一番待ち遠しかった行事が、毎年七月に行われている天王祭だった。その祭りの中には、保育園の時から私が最もあこがれを抱き、自分もやってみたいと夢見ていたものがある。それは稚児舞だ。

その夢を叶えることができたのは、小学三年生の時。先生や上級生の方に一つ一つの動作をていねいに教えていただきながら練習を重ねていった。あこがれの衣装に身を包み、初めて多くの観客の前で踊り、たくさんのお手をいただいたときは、何とも言えないくらいうれしかった。一つのことをやりとげた満足感なのか、小さな私の心がいっぱい満たされた感じだった。今でもその思いは変わらない。

私は稚児舞を通して、たくさんのお話を学んだ。天王祭二日目には村回りがある。各方向に出向くたびに、

「疲れたでしょう、もう少し、頑張つてね。」

と声をかけてくださる伊達地域の方々。地域の温かさがひしひしと伝わってくる。現在、神事を手伝ってくれる氏子さんが減少し、祭りの運営が難しくなっているという。それでもこうして伝統をつないでいこうと、たくさんの方が仕事の合間をぬって準備してくださっている。

ありがたいの一言だ。今年は、新型コロナウイルスの影響で、天王祭が縮小され、神事のみが行われたため、私たち稚児舞の出番はなかった。私にとっては六年生最後の稚児舞だった。正直思い切りあの舞を舞いたかった。残念な気持ちでいっぱいだ。でも私の他にもきっと同じ気持ちを抱いている人はたくさんいることだろう。そうした人々と手をたずさえて、再び光を灯せるよう、このすばらしき伝統を絶やさぬよう、私ができることを実行していきたいと思う。

今私は、総合的な学習の時間に「伊達市の歴史」について調べている。その学習を通して、伊達市には様々な伝統芸能や祭りがあることを知った。これらの伝統をつないでいくために、一体私たちには何ができるのか。私の考えは、まずはこうした伝統文化に直に触れることだと思う。多くの年代の方とふれあうことで心が豊かになり、地域の一員であることに誇りを持つことができるはずだ。自然と文化があふれている伊達市に住んでいる私たちは、学校だけでなく、地域の方々からもたくさんのお話を学び、これからも豊かな文化を築き上げていく使命があると強く感じている。私はこれからも、伊達の伝統文化にふれ、学び、次の世代につなげていく架け橋になれるよう、今を大切に生きていきたい。

梁川城への思い

梁川小学校 五年 岡崎 心優

わたしの住む梁川町には、昔、「梁川城」というお城がありました。梁川城は、以前、梁川小学校が建っていた場所にあり、わたしは、そこにお城があったことを祖父から聞いていました。

わたしが通っていた幼稚園のしき地に城跡があったのに、わたしは少しも知りませんでした。でも、あるとき祖父が、

「心優の幼稚園の近くに、梁川城というお城があったの、知ってたか。」と教えてくれました。小さくて、お城に全く興味のなかった当時のわたしは、

「ふうん。」

と、そつけない返事をしていました。

ところが、今回、伊達市のことを書くときに、ふいに祖父の言葉を思い出したのです。

梁川城は、今、建物はなく、石垣だけは残っています。「心字の池」というお城と一緒に造られた池もあります。でも、やはりお城という建物がなくて、「そこにお城があったんだよ。」と言われても信じられません。それなのに、梁川町の人々は「梁川城」のことを覚えていて。そして、梁川町の人々は、「梁川城」のことを子どもや孫に大切に伝えています。

現在、城跡には、梁川城跡地を示す看板が立てられています。それなのに、城跡の場所はどうでしょうか。草が生え、荒地地となっています。そこで、わたしは梁川町民として、そして伊達市民として、梁川城のことをたくさんの人に知ってもらいたいし、この場所に来てもらいたいのです。

わたしは、考えました。どうすれば、わたしの願いがかなうのかを。わたしの考える城跡は、城跡公園としてコンクリートや石で道が整備され、草はきれいにかりとられています。そして、ベンチがあり、梁川城を紹介する看板や資料館も建てられていて、だれもが、城跡を自由に歩くことができるようになっていくのです。梁川城のことを勉強するときには、梁川城に詳しい人がいて説明してくれます。そうすれば、私たち子どもも梁川城のことを詳しく学習することができます。そして、将来の私たちの子どもへも梁川城のことを伝えることができるのです。

伊達市には、梁川城だけでなく多くの史跡があります。それらを大切にするためには、市民ひとりひとりが、その歴史を知ることから始めなくてはならないと思うのです。そのためにも、その場所を訪れて実際に見たり、ふれたりすることができるようになってほしいと思うのです。

今回の作文をきっかけとして、わたしは梁川城のことをもっと調べていきたいと思っています。そして、祖父母と一緒に城跡を歩いてみたいと思っています。

読書を通して心を豊かに

梁川小学校 六年 遠藤 蒼依

私が三年生の時に、六つの学校が統合されて一つになりました。私が通っていた大枝小学校もそのうちの一つでした。

統合される前の年、私が二年生の時の冬に三年生から通う梁川小学校の見学に行き、授業も一緒にやりました。休み時間に、幼なじみと図書室に行きました。図書室に入り、私はびっくりしてしまいました。大枝小学校の図書室は本はたくさんあるのですが、そこからはあまり借りていませんでした。そのころは、正直本を読むことは、苦手でした。ですが、梁川小学校の図書室は、大枝小学校の図書室よりも本のレパトリーがあり、たくさんの子達が楽しそうに本を選んだり、借りたりしていました。この時に、四月から梁川小学校に通うのが、とても楽しくなりました。

四月になって、楽しみだった梁川小学校に通い始めました。新しくできた友達や幼なじみと一緒に図書室に行き、いろんな本と出会っていくうちに本が好きになりました。そして、六年生になった今も、本が大好きです。

私が本を好きになった理由は、学校司書の松浦先生の工夫にあると思います。学年ごとに読んでほしい本をまとめた「ブックリスト」や毎月のおすすめの本など、いろいろな工夫が図書室にはあります。

松浦先生の工夫がいつぱいの梁川小学校の図書室は、今年「文部科学大臣賞」を受賞しました。この事をきっかけに、たくさんの人に梁川小学校の図書室のことを知ってもらえてうれしいです。私も下級生に、もっと図書室の楽しさを伝えていきたいです。

梁川小学校の図書室には、去年亡くなったおはなしおばさん、横山幸子さんの文庫コーナーがあります。横山さんは、毎年、梁川小学校のみんなにいろんな昔話を聞かせてくれました。横山さんの福島なまりのやさしい声と続きが気になるお話に心ひかれていくうちに、いつもあつという間に時間が過ぎました。梁川小学校では、今も給食の時間に、横山さんが福島県の昔話をしようかいしているビデオを放送委員会が流しています。私は、週に一回のこの放送をとっても楽しみにしています。

この経験を通して、読書に触れると、考えを深めたり、世の中のことをたくさん知れたり、いろんな感情に出会えたりできることに気が付きました。そこで、さまざまな人が本に興味を持つてくれるように、伊達市で「移動図書館」を開くともっと良いと思います。梁川小学校の図書室は本が充実しているので私たちが読みたくなるような本がたくさんあるのですが、他の学校はどうなのかな、思ってたからです。伊達市の子ども達がたくさん本を読んで、心が豊かになるとすてきだなと思います。これから、いろんな本を読み、心を豊かにしていきたいです。

図書館へ行くこう

伊達小学校 五年 遠藤 和奏

今年のテーマ「きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を」を見るときに、わたしは、さまざまな年代の人たちが楽しく本を読めるようになったらいいな、と思いました。

わたしは、本を読むのが大好きです。小学校に入る前は、ねる前に読み聞かせをしてもらっていました。すぐく落ち着くので本が大好きになりました。また、わたしの周りには本を読む人たちがたくさんいます。その人たちと、同じ本を読んで話をしたり、本を読んでも分からないことを教えてもらったり、本を紹介し合ったりしています。本を読むと、どんどん世界が広がり、自分の知らなかったことを知ることができます。だから、あまり本を読まない人にも、もっと楽しんでもらいたいと思っています。

わたしは、小さい時からよく伊達市立図書館に本を借りに行きますが、そこで工夫されていると思うことが二つあります。一つ目は、本の置き方です。子どもが本を取れるように、子どもの本は下にあつて、大人の本は上の方にあります。二つ目は、自分が調べている本がどこにあるのかが分かるようにパソコンがあることです。とても便利で使いやすい図書館だと思います。そこで、もっと本を楽しめる工夫はないか考えてみました。

まず一つ目は、読書通帳を活用することです。今でも読書通帳はありますが、自分で書くタイプなので、つい書きわすれることがあります。また今の読書通帳は十五さつから三十さつしか記録ができません。そこで、わたしが使っていた読書通帳は、銀行のＡＴＭみたいに機械でタイトルや日付が印字されるものです。自分で書く必要がなく書きわすれることはありません。また、本を記録する数が多くなります。だから、読書通帳のタイプを変えると、もっとみんなが図書館を利用してくれるのではないかと思います。

二つ目は、図書館のことをもっとさまざまな人に知ってもらうことです。今は図書館の情報をインターネットでしか見られないので、スマートフォンを持っている人は見られません。そこで、インターネットにのっている情報を印刷して市政だよりにはさむと、たくさんの人たちが見られるようになると思います。

三つ目は、ポイントせいにすることです。例えば十さつごとに五ポイントがもらえて、十ポイントたまるとくじ引きができます。景品は、しおりや本を借りたときに使うバック、図書カード五百円分などです。ポイントせいにすると、楽しく本を読めると思います。

こういった工夫をすることで、図書館になじみのない人たちでも楽しく利用できるのではないかと思います。さまざまな年代の人たちが本を読むようになると、学ぶ心とゆたかな文化をきずいていくことができて、さらにいい伊達市になると思います。

佳作

地域の伝統を守る活動を

小国小学校 六年 狗飼 梨央

私が暮らしている小国地区では、地域みんなが協力して行う活動がたくさんあります。

例えば、小国小学校で行う花の苗植えや門松作りでは、地域みんなが学校へおいでになって、苗の植え方や門松の作り方を、ていねいにねいに教えてくださいます。

また、私たちの通学路に植えてある花々も地域みなさんが季節ごとに植えてくださっているものです。春はパンジー、夏はサルビア・マリーゴールド。いつも私たちの目をなごませてくれます。

このように、小国地区のために活動してくださっている地域の方々を見習って、私も何かできることはないだろうか考えた時、まっ先に思い浮かんだのが「霊山太鼓」です。私は四年生の時から、霊山太鼓の練習に参加しています。

私が入っている組では、主に「だてな太鼓祭り」や「小国地区盆踊り」で太鼓をたたきます。教えてくださる先生は、太鼓を打つ手が止まった時には待っていてくださったり、わからないところがあると、実際にやってみせてくださったりする、とても優しい先生です。人数は少ないけれど、私

はこの組に入って良かったと思っています。

太鼓祭りでは、この地域を盛り上げようと、伊達市内のいろいろなところから組が集まります。太鼓をただだけでなく、大声で盛り上げることもあるので、会場全体が一体となっている気がします。小国地区で行われる盆踊りは、太鼓をたたく組数は少なくても、小国に住んでいる子どもからお年寄りまで、みんなが輪になって踊っているのを見ると、とてもうれしい気持ちになります。太鼓祭りも盆踊りも、地域みなさんを楽しませる活動で、私も太鼓をたたきながら、毎年この活動に参加できて良かったなと思います。

でも、今年はちよつと事情が違います。コロナウイルスのえいきょうで、太鼓祭りも盆踊りも中止になってしまいました。そして太鼓の練習までもなくなってしまうました。今年は地域みなさんが楽しめる活動、そこに私も参加できる活動がどんどんなくなってしまい、本当に残念です。小国地区のみんなが一体となる活動がなくなってしまう、本当にくやしいです。来年こそはまた太鼓を練習して、地域みなさんが笑顔になれる活動に参加したいと思います。あの会場の一体感をまた味わいたいと思います。

私は学校・地域の活動を通して、たくさんの方の支えや、地域のために努力することの大切さを学びました。これからも地域のためになる活動がずっと続いていると思います。霊山太鼓を続けながら、次に何ができるかを考えていこうと思います。今考えているのが、地域の方の教えを生かして花だんの手入れをしたり、草むしりをしたりする美化活動です。私も美しい小国の伝統を守っていききたいです。

未来へ向けて学ぶこと

堰本小学校 五年 橘 太一

ぼくのふるさと堰本は、自然豊かなところです。田畑の緑、山や森の緑が広がっています。特に堰本小学校は高台にあるので、窓からのながめがきれいです。春はあづま山の残雪と満開の桜、夏は木の葉が濃い緑色になり、秋は赤や黄色の紅葉があざやかになります。ぼくの家は専業農家で、米、トマト、なす、枝豆などたくさんのお作物を作っています。今年総合的な学習の時間で、バケツ稲さい培をしています。ぼくは、バケツになえを植えながら、本当の田植えは手間がかかって大変なのに、ずいぶん単だなぁと思いました。ぼくの家では、家族みんなで田植えをします。このごろは、ぼくも兄も機械の動かし方を覚えているので田植えを任せられるようになりました。でも、本当に大変なのは水の管理などたくさんあって、そういう仕事は祖父や父でなくてはできません。

ぼくは今回、授業で「田んぼの生き物」というテーマで調べ学習をしました。田んぼにはいろいろな生き物がいて、それらは互いに食べたり食べられたりという食物連鎖という自然の営みの中で、バランスをとって生きているということがわかりました。ある友達には、田んぼの虫にも益虫と害虫がいて、益虫は、いい稲作りを助けてくれるということを調べて書いていて、感心しました。中には、益虫

にも害虫にもなる虫がいるそうです。そう考えると、自然環境を守ることって大事だなと思います。社会科の授業で、山形県の庄内地方の米農家の人たちは、種もみがらで環境にやさしい肥料作りをしていると学習しました。すごいアイデアだなと思いました。でも、よく考えたら、ぼくの家でも環境を考えた農業をしていることに気づきました。例えば、肥料は、化学肥料はできるだけ使わずに、牛肥に生ごみなどを混ぜて作っています。また除草剤も、田の周りに最低限しか使いません。だから、家の田んぼには生き物がたくさんいるんだなと思います。生き物がたくさんすむようないい土や水のところに、いい作物が育って、それを食べた人は健康になります。みんなで環境を守ろうと考えて行動したら、みんながますます健康になるにちがいません。

ぼくは、総合的な学習の時間や社会科で学習したこと、インターネットで調べ学習をしたことで、いろんなことがわかって、今まで気づかなかったことが全部つながったような気がしました。勉強して、今までわからなかったことがわかったり、気付かなかったことに気付いたりするのは楽しいことです。これからもいろんなことに興味を持って調べたり学んだりしていきたいです。そして、人間も虫も森や川も、ずっと豊かであるような未来になるように、少しでも役立つ人になりたいです。

身近な伊達を学ぼう

上保原小学校 六年 渡邊 友悠

「学ぶ心とゆたかな文化をきずきましょう」

ぼくは、学校の玄関に掲げられている伊達市民憲章の一文を、あらためて確かめてみた。

ぼくが住んでいる伊達市は、県庁所在地である福島市にも近く、農作物も豊富。とても住みやすいと思う。しかし、伊達市の文化と言われると、学校でも話題になることはあまりなく、阿武隈急行のほとりの最寄り駅である高子駅では、「伊達氏発祥の地、高子」とアナウンスされても、当たり前すぎて、ぼくは気にもとめず、深くその歴史を知ろうとしなかった。

そこで、この機会に、伊達の文化や歴史をふりかえり、自分自身、伊達市の魅力を再発見したいと思う。

まずは、「あんぽ柿」。あんぽ柿は、柿を干して作ったものだが、伊達市のそれには、他の地域の干し柿と違いがある。それは、イオウで蒸してあること。鮮やかなオレンジ色に仕上がるという特長がある。地元の人が何十年も前に研究を重ねて開発した製法だそうだ。「すごい。」あきらめずにやり続けた努力をぼくはとても誇りに思う。今では、フランス料理にも使われ、桃と並んで伊達を代表する特産物になっている。ぼくも一度食べてみたいと思う。

二つ目は、「堰」。堰というのは、田や畑に水を引くために、遠くの川から水路を掘って水を流す仕組みである。ぼくたちの地区には、東根堰がある。この堰のことは、四年生の時に学習した。工事の機械や車のない時代に、土地の高低差を測り、全部人の手で掘ったこと、そして多くの人々の苦労は、しっかりと覚えている。

この「あんぽ柿」と「堰」がすごいのは、今でも伊達の産業を助け、発展させていることである。そして、この伝統を引き継いできた伊達の人々もすごいと思う。

三つ目は、城跡だ。ぼくは、「大枝城」と「靈山城」に興味がある。大枝城は、かつて伊達氏が、梁川城を攻め落とすときにいたと言われるお城だ。どんな戦いが繰り広げられたのか、想像するだけでドキドキしてくる。靈山城は、さらに時代はさかのぼり、南北朝時代の武将、北畠顕家にゆかりのあるお城である。今でも当時を偲んで、「濫觴の舞」が奉納されている。ぼくたちと同じ小学生がはかまをはいて、剣を持って踊るとのこと。今では、穏やかな農村地帯になっている伊達だが、昔は、命をかけた出来事がたくさんあったのだろう。伊達市には、観光できる歴史遺跡がたくさんある。「高子二十境」「旧亀岡邸」など、数え切れないくらい見所がある。調べれば調べるほど魅力がある伊達市。ぼくは、サッカーやゲーム、動画を見るのも好きだが、時間を見つけて、これからも伊達市のことを調べていきたいと感じた。身近な伝統に再度目を向けることが、伝統を絶やさず、引き継いでいくことになるのだと思うからだ。

学びあう町に

月館学園小学校 六年 高木 梨央南

私が通う月館学園は、月館の三つの学校が統合し、今年開校しました。それにより、今までできなかったいろいろな体験ができるようになりました。ロボットプログラミングの学習では、一人一台ロボットがわたされま
す。プログラムを作ってロボットを動かすのは初めての体験で難しいですが、これからどんな人の役に立つよう、たくさん考えながら学習していきたいです。

英語にふれる時間も増えました。外国語の授業では、中学校の先生が教えてくださったり、昼の放送では、外国人の先生が英語のクイズを出してくださったりすることで、「この言葉は英語で何と言うんだろうね。」など普段、友達との会話の中でも英語に関する話題が出るようになりました。

音楽では、色々な楽器にふれることができます。私は今年初めて「こと」を体験し、演奏できるようになりました。日本の昔からの文化にふれることができて、うれしいです。

このように、月館学園では多くのことを学ぶことができるとともに、中学生や中学校の先生方と交流できるので、多くの人との関わりが増えて、いい環境だなと思います。

学校だけでなく、私は普段から、地域の方々からも学ぶことが多くあ

ります。

以前、私の祖父母が朝早くから地域のごみ拾いに参加していました。私は、地域の人が地域のため、環境のために朝早くから参加していると思うと、すごいなと思いました。それと同時に「私も何か地域のために活動したい。」と思うようになったのです。

そんなある日、友達と散歩をしていると、道に空き缶や紙製のコップ、たばこなどが落ちていることに気づきました。その時、私は祖父母のごみ拾いのことを思い出したのです。そこで、私は友達と一緒にごみ拾いをすることに決めました。家からごみ袋と割りばしを持ってきて、家のまわりを歩いてごみを拾いました。気持ちを高めながら一生けん命ごみ拾いを続けました。また、その途中で、地域の人に声をかけていただくこともありました。

近所のおじさんから

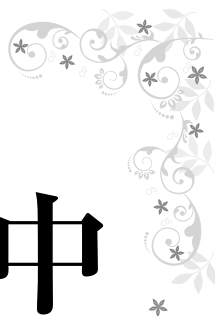
「ありがとう。」

と言われたときは、自分はいいいことをしているのかな、と感じ、やってよかったなと思いました。

もし、祖父母が行っていたごみ拾いのことを知っていなかったら、ごみ拾いをしたいと思わなかったでしょう。私は、地域の人たちから学び、えいきょうされていることに気づきました。

このように、伊達市では学びの環境が充実していて、人々のよい行いを通して、お互いえいきょうし合って生活しています。そんなすてきな町に住むことができて、とてもうれしいし、私はこの町をほこらしく思います。

中学生の部



最優秀賞

学習を学習へ

霊山中学校 三年 須田 玲菜

みなさんには「学ぶ心」がありますか。こう聞かれて思うことは人それぞれだと思います。例えば、

「私は勉強するのは嫌いだから、そんな心があるわけがない」

そう思った人もいるかもしれません。勉強することは、机と向かい合って字を書いたり教科書を読んだりすること、大半の人がそう思っているのではないのでしょうか。ですが、本当にそれだけが勉強なのでしょうか。私はそうではないと思います。

私は勉強とは「自分の知らない事を知る」ということだと考えます。日常生活において、新しい事を学ぶ機会実は身近な所にいろいろあります。

その中でも読書はとても身近で、手軽に生涯に渡り学ぶことのできるパートナーです。私は小さい頃から読書に親しみ、今でも学校や家で読書をする機会があります。その中で、自分の知らない世界にたくさん出会ってきました。そして、その世界について学ぶことは、学校の授業に負けないくらい勉強になると私は思います。

また私は、地域の人との会話から学んだことがたくさんあります。

一年生の福祉体験や二年生の職場体験で、地域の方と話すことができました。中でも、戦時中の話がとても印象深く残っています。

その方は当時学生で、勉強をせずに工場で働かされたと聞きました。学校に行って勉強がしたくてもできない、そんな日々が続いたそうです。

その話を聞いた時、私は、今の学習環境はとても恵まれていると思いました。勉強がしたいと思えば勉強ができる。私達にとって当たり前すぎる事が、昔の人や発展途上国の人々にとってはどれだけありがたいことか、私達には理解しにくいことです。ですが、勉強ができる環境があるということは感謝すべきことだと忘れず、日々を過ごすことができれば、自分を変えることができると思います。このように、地域の人との会話が自分への刺激となり、自分自身を良い方向へ変えるきっかけになることも、他にもたくさんあるはずです。そして会話を通じて、地域とのつながりを持つことで、地域の一員としての自覚を持ち成長することが出来ます。

このように、人は毎日何かを「学んで」生きています。それは年代など関係なくみんながそうであると思います。一日一日を振り返った時に、学んだことは無いという人はいないはずですが、どんなに小さな事でもそれは学びとなります。だからたくさんの人に、身近なところから「学ぶ」ことの楽しさを、日常生活でもっと意識して味わってもらいたいです。そして、伊達市民みんなで築いていきましょう、「学ぶ心」を。

優秀賞

月館町と未来を背負う私たち

月館学園中学校 二年 齋藤 りおん

私たちの学校は、今年の四月から三校が合併し月館学園として新たな歴史のスタートを切った。私は今、小学生と共に生活し、小学生に刺激を受けている。

私はこれまであまり中学校の図書室に行かなかったが、小学生用の本が新たに並べられたことで図書館に行く人が増えたのに影響されて、一度行ってみた。そして、小学生がたくさんいることに驚いた。私はまだ慣れていなかったのもので、中学校の図書館に小学生がいることに違和感があったが、本に親しみを感じ、手にとって読むことが楽しいと思えた。同時に周りにいた小学生が楽しそうに本を選んでる姿を見て、自分が毎日のように本を借りに行っていた小学校時代を思い出し、懐かしさを覚え、改めて本に興味を持つことができたと感じている。

私はこのように小学生に刺激を受けて、自分にとって新感覚の日々を送っているが、反対に私たちも小学生に刺激を与える存在にならなくてはいけないと思う。

私たちは生徒会で「ピカピカ運動」という地域への奉仕活動を行っている。いつもお世話になっている公共施設の清掃を行ったり、季節に合った

プレゼントを作り町内の主な施設や商店に配ったりしている。今年度は、地域のお年寄りに向けて手紙を書くという活動も始めた。学園の特長である「地域とつながる」ということと月館中学校の時から続いている「ピカピカ運動」を、地域の方々に知って頂ける機会なので、中学生全員で力を合わせて取り組んでいる。

伊達市の中で最も若年層が少なく高齢化が進む月館町。その中学生がこのような活動を通して積極的に地域の活性化に携わろうとしている姿を、ぜひ小学生に見てもらい、引き継ごうという気持ちを持ってもらいたい。

私は小学生だけでなく、地域の方々からも影響を受け、学ばせてもらっていることがある。それは学校内で私たちのために、清掃や花植えをやって下さっていることだ。月館町にはボランティア団体がある。生徒たちが気持ち良い学校生活を送れるように活動していच्छる姿は、まさに私たちの「模範」である。

私が感心したのは、みんなの目に見えるところで活動されていることだ。目に見える形で活動していただくことで、私たちは地域の方々の存在を身近に感じるができる。これは逆の立場でも同じではないだろうか。私たちが「ピカピカ運動」を目に見える形で行うことで、小学生、また地域の方々にも、中学生と「ピカピカ運動」の存在を認識してもらえと思う。伊達市で初めての小中一貫校だからこそ、様々な課題とそれ以上にたくさん可能性がある。小中学生、地域の人が共に関わり合える関係を築き、未来へ進んでいきたい。

恵まれた町の中で

梁川中学校 三年 橘内 優菜

私が生まれてから約十五年間住み続けている街「伊達市」には、数え切れないほどたくさんの魅力があります。私は、特に今回のテーマである「生涯を通して学べる教育環境の充実」は、最大の魅力であると思っています。「伊達市のこんなところが良いんだよなあ。」と思った経験が二つあります。

まず、私が通っていた小学校についてです。私は「梁川小学校」に通っていました。その学校は東日本大震災の影響で校舎が使えなくなっていました、仮設校舎での生活を送っていました。そして三年生になる頃、立派な校舎ができ、その中に「スクールコミュニティ」という教室がありました。その教室では、サポーターの方々が昼休みや放課後の時間を使って私達にさまざまな体験をさせてくださいます。例えばそろばん体験や、茶道体験をすることが出来ます。私はこんなに身近な場所で子ども達と地域が触れ合うことができるなんて素晴らしいなと思いました。さらに、梁川小学校は「子どもが足を運びたくなる図書館」を目指し、おすすめコーナーの設置や明るく楽しく感じる館内装飾の工夫など、子ども達が本を読んでもみたいと思う環境づくりに積極的に取り組んでいました。そしてついにこの取り組みにより読書活動優秀実践校で文部科学大臣賞を受賞す

ることができました。私はこのニュースを知り、とても嬉しく思いました。私もそのような恵まれた環境の中で学べたことを誇らしく思うと同時に、今になってもう少し図書室を活用すれば良かったと思います。その恵まれた環境の中にいたことを気づくことが出来なかった自分が恥ずかしい気にもなりました。

私は最近まで吹奏楽部に所属していました。この部活に入っているちばん驚いたことがありました。それは「きらめき事業」といって、東京藝術大学の学生の方達と合同練習が出来るものです。私達の学校はその事業の影響もあり、久し振りの県大会へ出場することが出来ました。しかもきらめき事業を行ってくださったっているのが伊達市だと知り、改めて伊達市に住んでいて良かったなと思いました。

私はこれらの二つの経験から、伊達市は生涯を通して学べる環境がとても充実していると感じました。このような街に生まれ、育ってきた私は幸せ者だと思います。そして、次に生まれてくる子ども達にも幸せだと思ってもらえるように、出来る事から、もっと伊達市を発展させていきたいです。

優良賞

町の文化を広めるために

霊山中学校 一年 三浦 天寧

「霊山町って何か文化とかある？」

「んー、無いんじゃないかな。」

私達にとってはあたり前のような会話だった。しかし、私は本当に霊山町には「何も無い」のか、と考えてしまう。そんな時は、霊山太鼓があるではないか、と思った。だが、地域の人にとっては有名なものの、少し遠くへ行けば、知る人などいないだろう。

そこで、私は、霊山太鼓がもつと有名になれば、霊山町の文化に色々な人が触れてくれて、霊山町は「何も無い」というイメージが無くなるのではないかと考えた。私が考えた霊山太鼓をもつと広める作戦はこの二つだ。

一つ目は学校で霊山太鼓を教えることである。色々な人々に太鼓を伝えるには、まず地域の子どもたちに教えることが重要だと考えた。なぜなら、子どもたちに教えればその子どもが大人になった時、その人たちが太鼓という文化を次の子どもたちや色々な人に教えられるからである。さらに、自分の地域の文化をその町の子どもが知らないのは、文化を広める以前の問題なのではないか、と思う。幼稚園、保育園の時期から太鼓に触れさせれば、子どもは楽しく覚えられると思うし、その子の保護者も霊山太鼓を

知ることができて一気に文化の輪が広がると思う。

二つ目は太鼓講習会をもつと色々な場所で行うということである。現在講習会は冬と春、霊山の交流館で行われている。しかし、その場所だけでは色々な人が太鼓を習うことは難しい。そこで、講習会の場所を増やせば色々な人をたくさん呼ぶことができる。結果、たくさんの人が夏に行われる太鼓祭りなどで楽しく太鼓をたたける。そしてその人たちからどんどん太鼓の文化が広まっていくであろう。

この二つは私のような子どもでは実現しにくい。だから、私たち子どもでも、誰でもできる太鼓を広める作戦を考えた。

それは、太鼓を知らない人、知っているけれどやったことがない人などを、祭りや講習会にさそったり、太鼓について教えてあげることだ。友達を祭りにさそえば、楽しみつつ太鼓について知ってもらえる。太鼓の知識を教えてあげれば、その人に太鼓について興味をもってもらえる。この町に住んでいる私たちから文化を発信していけば、きっと霊山町は有名になるだろう。

霊山町の文化は何も霊山太鼓だけではない。もつと色々な文化があるだろう。自分たちが知っている文化を、他の人にどんどん広めてほしい。私も霊山太鼓をみんなに知ってもらえるよう、これからも太鼓をたたき続けたい。

「霊山町って何か文化とかある？」

「えーっと霊山町にはね・・・」

このような会話があたり前になるように、霊山町の文化を日々学んでいきたい。

今をつないだ過去と未来

月館学園中学校 一年 熊坂 栄那

二〇一一年、夏、私は新潟にいました。

この年の三月一日、東日本大震災がありました。私はそのとき、月館保育園にいましたが、ほとんど記憶はありません。震災があつて、私達は家族で避難しました。最初の頃は、新潟県の越後湯沢にいましたが、引っ越しをして、新潟市の新津に行つて九年間を過ごしました。

私が新潟に移り住んだとき、一人福島に残つた父は、「地域のためになにかできることはないか」と仲間達と話し合いをしました。そしてこれからの子供達の安心、安全な未来を創りたいという気持ちから、マルシェという地域イベントを開催したり、新しい学園をつくる準備を今現在までしてきました。

「何で私達とも遊ばないでそんなことをやっているのかな」と思ひ、父にきいてみたことがあります。

そのときの答えは、

「今までこの地でお世話になつて生かされてきた。だから今度は、他の人の役に立つこと、みんなが喜ぶようなことを恩返しでやっているんだ。自分が楽しくやっていることはめぐりめぐつて他の人達も楽しくなる。いいことのくり返しをしていれば必ず自分にも良い

ことが返つてくると信じてやっているんだ。」

というものでした。話しているときとマルシェをしているときの父の顔が同じだったような気がして、仕事や家庭を守るためにもこういうことも大事なんだなと思いました。

そういうところを見てきたので、今年中学の入学を機に、福島に戻ることを家族と話し合い、決めました。ちょうど、新しい学園になるということを知って、興味がわいてきたのと、保育園時代の友達とまた再会できるのが楽しみで仕方なかったからです。そしてこれから勉強していく中には、きっと友達と地域のためになにかをするときがあるはずなので、そのときがきたら私も逃げずにそれに向かつて行動しようと思いました。

身近に、いろんなことをして、地域や他の人達と関わっている父がいたからこそ、気付けたことがあるんだと思います。父のような行動をするということは、本人のためにも、周りの人のためにも、地域のためにもとても大事なんだと考えます。

私は今、月館学園中学校の一年生です。

新潟から来た私には、いろいろなことが新鮮です。他の人が気づかない、地域や学校の友達の良いところが見えます。これからここで、周りの人達と関わり、いっしょに学び、考えて、良い未来に進んでいきたいです。

私達が受け継ぐ

月館学園中学校 三年 笹原 琉愛

笛の音。太鼓の音。人々の掛け声。たくさんの音が鳴り響く神社で、二年に一度の「牡丹獅子舞」が行われる。

牡丹獅子舞とは、私の地域で行われる行事の一つだ。一五八七年、神社の再建をした際に、喜んだ村人達によって奉納されたのが始まりといわれている。演技の中心は、獅子児と軍配団扇持ちの子供五人。その他に道六、お医者様、花笠かぶり。そして、笛、太鼓の囃子によって舞が進められる。約四百年以上前から続く歴史ある行事だ。

獅子舞の良いところは、地域の人が集まって、「楽しく協力して」行事を行うところだと思う。

例えば、本番までの約二週間。夜、公民館に集まり、たくさんの人が協力して準備を進めるところだ。道具の手入れをしたり舞の練習をしたりなど、みんな本番に向けて真剣に取り組む。

しかし、最近は少子高齢化が進み、舞を踊る子供達が減ってきている。牡丹獅子舞では、踊る獅子児と軍配団扇持ちの子供五人は、男の子が踊るという決まりがあるため、余計に踊れる子供の数が減ってしまった。

その結果、私は女の子だが獅子児として踊ることになった。そして私一人では足りず、半分以上を女の子が占めることになってしまった。

この事から私の中で不安な気持ちが募っていった。この先獅子舞を続ける事ができるのか。人は足りるのか。どんどん不安な事が思い浮かんでしまう。

私は絶対に「牡丹獅子舞」を終わらせたくない。続けていきたい。なぜなら、この行事を通して地域の人達と交流できるからだ。私は人付き合いが得意な方ではないが、この行事でたくさんの人と話すことができた。その貴重な行事を地域に住む個人にとっても地域全体にとってもこれから先もかけがえのない行事にするのだ。

ではどうしたら良いのか。そこで私は考えた。子供達が減っているなかでどうやって獅子舞を続けていくのか。

思いついたのは地域だけではなく、町で協力して行うということだ。今までは小さな地域の伝統として行ってきた。しかしその範囲を町に広げることで人が増えると思ったからだ。例えば町の小中学校に協力してもらい獅子舞を踊りたい人を募集するなど。人手不足を解消するだけでなく、獅子舞を知る人を増やすことができる。

私はこれからも試行錯誤しながら伝統を続ける方法を考えていきたいと思う。また、私のように「獅子舞を続けていきたい」という意識をもつ人を増やして、下の世代の子供達にも受け継いでもらいたい。そしてこの歴史ある「牡丹獅子舞」の行事をいつまでも受け継いでいきたい。

音楽を楽しみ、音楽でつながる

伊達中学校 三年 八巻 愛香

昨年五月、東京藝大生と伊達市の中学生との合同演奏会が行われた。大震災の翌年から始まったこの演奏会は第八回を迎えるということだ。中学二年だった私にとっては初めての一緒の演奏。緊張の中、あつという間に終了してしまった。そのとき、

「来年は一緒に演奏する最後の機会、来年までスキルアップできるように頑張ろう。今日よりさらによい演奏をしよう。」

と、友達と次を目指して話した。しかし、今年の演奏会はコロナの影響で一年延期となってしまった。今年のこのメンバーで演奏したかったのに……。

震災以降、ずっと続いている藝大生との交流を通じて、私たちは中学一年の時からいろいろなことを教えていただいた。トロンボーンを担当していた私は、主に、ロングトーンやリップスラー、タンギングなどの基礎を教えていただいた。特に苦手なタンギングは、「初めはゆっくり。そのテンポで確実にできるようにになったらだんだんテンポを上げていくといいよ。自分に合った発音の仕方で吹くといいよ。」

とその場で楽器を手にながら説明してくれた。そのようなアドバイスや練習方法が続けていたら少しずつできるようになった。

合同演奏会では、中学生と藝大生が一緒に演奏する『合同ステージ』というものがある。そこでは、藝大の方が隣で吹いてくださるため、細かいところまで肌で感じる事ができ、とても勉強になった。さらに、合同演奏会だけでなく、きらめき事業の交流活動でも藝大の方々の演奏を聴かせていただいている。間近で聴くことができ、とても貴重な経験となった。八年間、ずっと続いてきた藝大との交流。伊達市の吹奏楽部員にとっては、他の地区にはない、恵まれた機会だった。直接指導してもらえ価値に改めて気づいている。

今年は、この演奏会が一年延期になり、吹奏楽コンクールも中止になってしまった。先生方の努力により録音による審査が行われ、それに向けての練習となった。

「昨年や一昨年はあまり質問できなかったから、今年こそはコンクール曲についての質問をいっぱいして、上達するぞ。」と意気込んでいたが、それも叶わなくなってしまった。「次は、こうしよう」とか「来年は……。」と先延ばししないで、その時その時にできることはやらないと駄目なんだと痛感した。

中学校最後の演奏会がなくなってしまい、今年のこのメンバーで演奏することができなくなってしまったのは悲しいが、東日本大震災後、『音楽で復興支援を!』と始まったこの伊達市きらめき事業がこれからも続いていてほしい。私もみんなに希望を与えられるような演奏が届けられるよう、これからも音楽を続けていきたい。

佳作

私達で築く新しい伊達市

桃陵中学校 三年 齋藤 彩音

「伊達市ってどんな所？どんな歴史や文化があるの？」

こう聞かれて答えることが出来るだろうか。伊達市には、良い所や歴史、文化もたくさんある。私達はその伊達市の良い所をちゃんと知っているのだろうか。歴史や文化を学べているのだろうか。こう思った時、私は今自分が知っている伊達市が全てではないと思った。

「伊達市ってどんな事をしているの？」

私は家族に聞いてみた。

「伊達市は『健幸都市』への取り組みをしているみたいだよ。」

私は『健幸都市』とは何だろうと思い、詳しく調べた。『健幸都市』とは、市民が健康で幸せな暮らしをするための取り組みだ。具体的に、健康をうながす活動や暮らしをより良くするための町づくり、また健康で幸せな人をつくるといった方針がある。伊達市は市民へ向けた取り組みも充実しているということ、これを聞いて知ることが出来た。他にも知らないことがあるんじゃないか、と思い周りの大人に聞いた。すると、子育てや教育、観光に関する取り組みも行われていた。私は伊達市について学ぶことが出来たのと同時に、大人は

私達が知らない伊達市について、多くのことを知っているということに気付くことが出来た。伊達市についてあまりよく知らない人は、まだいると思う。だから、ぜひ大人や伊達市について詳しく知っている人から学んで、伊達市についてもっと知って欲しい。私のように、今まで自分が知らなかった新しい伊達市に気付くかもしれない。そして、もっと新しい伊達市を知ろうと思うだろう。その新しい伊達市がずっと長く続くように、これからは、私達が教えるべき時なのだ。伊達市には、まだ伊達市についてよく知らない子供もたくさんいる。だが、やがてその子達も新しい伊達市を築き上げていくのだ。だから、私達が伊達市について教えてあげることの出来る存在でなくてはならない。私達が、今の大人達から伊達市を受け継ぎ、その伊達市を私達がもっと大きくし、その伊達市を今はまだ小さい子供達に渡す。伊達市は代々で大事に受け継いでいかななくてはいけない。そのために、今は一人一人が新しい伊達市を発見し、より良い伊達市を築くことの出来る伊達市民になるように頑張る必要がある。

私は伊達市を知ってもっとすてきな伊達市にしたいと思った。今度は、

「伊達市ってどんな所？どんな歴史や文化があるの？」

こう聞かれる番だ。小さい子供から伊達市の成長を見守ってきたお年寄り、この伊達市民全員が丸となって伊達市を築き上げる。これが、私の思う新しい伊達市の姿だ。

昔からの文化

松陽中学校 三年 遠藤 蒼斗

僕は、この伊達市に住んでいて、色々な自然、そして文化などに触れることが出来ました。そこで、印象に残っている文化を三つ挙げたいと思います。

一つ目は、祭りです。伊達市には、花火大会や太鼓祭りなどがありますが、どれもたくさんのお客さんを集めていてすごいなあと思いました。今まで祭りに行ってきたことがありますが、どの祭りも、小さい子供から高齢の方まで楽しめるような内容で構成されていて、さらに屋台も、伊達市ならではの商品売っているところがあつて、とても工夫しているなあと思いました。祭りは世代関係なく楽しめるとてもよい文化だと思います。しかし、お客さんが楽しめるようにするため、裏でゴミ拾いをしていてくれる人、または屋台などの会場の準備をする人の苦勞をけっして忘れてはいけないと思いました。僕が今出来ることは、祭りだけでなく苦勞している人の手助けだと思いました。日常生活で考えてみると、祖母が重い物を持っていてつらそうな時に自然と助ける、または、道に落ちていたゴミを積極的に拾うなどの一つ一つの行動が大事だと、祭りから考えさせられました。

二つ目は、歴史です。伊達市の歴史はとても奥が深いなあと思い

ました。先ほど紹介した祭りも歴史の一つだと思います。伊達市の歴史は学べば学ぶほど色々あることが分かります。その中からあんぽ柿について取り上げます。僕は転校して来たため、中学校一年生まではあんぽ柿を食べたことがありませんでした。そのため今でも、初めて食べた時の衝撃は忘れられません。その時、僕はあんぽ柿が伊達市で開発され、長い歴史をもっていることも初めて知りました。これを知って僕は、良い文化を後世に継げていくことは大事だと改めて思いました。

三つ目は、自然です。外を歩けば鳥のさえずりが聞こえ、夜になれば星空を静かに見渡すことが出来る、これが伊達市の自然の良さだと僕は思いました。僕が前住んでいた所は、車通りが多く、自然の音などは聞こえない所でしたので、夜もあまり熟睡が出来ずストレスが溜まるが多かったです。だから僕は、豊かな伊達市の自然が好きです。この豊かな伊達市の自然にもたくさんの方が関わっていることを考えさせられます。僕もこの自然をこれからずっと保ち続けるため、ボランティアに協力したいと思いました。

最後に、伊達市の文化には様々な人が関わっていて、様々な苦勞があることが分かりました。これまでの文化を崩さず、後世に継ぎたいです。

未来へ繋ぐ「文化」と「絆」

桃陵中学校 二年 引地 美乃梨

私の学校には、三つの文化部があります。私はその文化部の一つ、合唱部に所属しています。私が所属している合唱部の全員が曲の歌詞を大いに表現し、複数あるパートを一つに重ね合わせると、人の心を動かせるほどの歌声となります。一人一人の個性を生かし、年齢の幅などは関係なく、誰でも楽しく心を通わせることができます。これは、合唱の力とも言えます。そして、私には合唱の力を教えてくれた思い出の大会とコンサートがあります。

それは、「ももの里コンサート」です。このコンサートは私が入部してから初めて大勢の人の前で歌ったコンサートです。私たちは、その本番のために先輩と発声をしたり、苦手な所や難しい所、パートでバラつきがある所をたくさん練習しました。そして本番の日、私はずっと緊張していました。多くの不安を抱えながら立ったステージからはたくさんの観客の姿が見えました。しかし、観客の視線がこちらを向いているのを肌で感じられました。物音一つない会場で私たちは歌い出しました。全力で歌い終えた瞬間、観客席から大きな拍手が聞こえました。私たちはその拍手に包まれながらステージ裏へ行きました。そこには私たちよりも前に歌い終わった方々がいました。その方々は、ステージから降りてきた私たちに大

きな拍手、歓声を上げてくれたり、涙を流してほめてくれたり、「あなたたちみたいな若い人達がステージで歌ってくれて嬉しい。」「次もまた期待しているよ。」と伝えてくれました。そんな言葉をかけてくれる人達がいることをそこで私は実感しました。とても感動した時間でした。私はその時思いました。どんな年代でも楽しめて感動できる。そして褒め合ったり、共感し合ったり、見て聞いて学べる。そんな合唱という文化を次の世代にも繋いでいきたいと思いました。多くの方々から期待されるのは、私はその時が初めてで自分にとつての誇りだと私は思いました。

もう一つは「さわやかスポーツ大会」です。この大会は、障害を持った人達に運動を楽しいと思ってもらうイベントです。そこに、私たちが歌声を届けに行きました。その会場には、多くの年代の人がいてとても緊張と不安でいっぱいでしたが、たくさんの人の協力があったため、無事歌いきることができました。その時、とても心が温まりました。

私は、たくさんの歌う機会を与えてくれた地域の方々、そして多くの経験をさせてくれた伊達市が大好きです。伊達市の人達は、文化を守り次の世代へ繋ぎ、仲間や友人との絆を大切にします。これは、合唱も同じで、歌う仲間との絆が無くては、成り立つものも成り立たないと思います。だから、助け合いや自分の意思を持って前へ進む。そうやって、私たちが伊達市の絆も文化も守り続けたいと思います。

文化を大切に

梁川中学校 一年 佐藤 百夏

最近、新型コロナの影響で、文化にふれる機会が少なくなっています。しかし、一人一人が町の一員として、その町の文化を知っておくことも大切だと思います。

私は、正直自分の町の文化について全く興味がありませんでした。それも、この町に文化なんてあるのという感じで一つも知りませんでした。でも、この作文を書くということで、自分の町の文化について調べてみました。すると、私が思っていたよりもたくさん文化があるということが分かりました。

私は、特に養蚕について調べてみたいと思いました。養蚕とは、蚕を育て、まゆを作らせ、そのまゆから糸をとることだと分かりました。そのことを母に伝えると、母の実家でも、養蚕業といって、まゆを作りそれを工場に送っていたそうです。また、養蚕業をしていた家は、母の実家の他にもたくさんあったそうです。しかし今は、養蚕業をしているところは少なく、養蚕を知っている人もそう多くはないと思います。でも、まゆを使ったワークショップや養蚕についての展覧会などがあるということが分かりました。このようにイベントなどを通してふれあうことで、少しでも自分の町の文化について知ることができたり、親しむことができたりするのではないか

と思いました。

中には、この作文を書く前の私のように、自分の町の文化なんかどうでもいい、興味が無いといって、新しいものばかりに目がいてしまいがちな人もたくさんいると思います。しかし、自分の町の文化について調べること、自分の町のすばらしさやよさを、改めて実感することができると思います。また、そのことをきっかけに、大切にしようと思ったり続けていこうと思ったりすることで、これらの文化を存続させていくことができると思うのです。

このように、町の文化についてのイベントなどに積極的に参加することで、ふれあうことができたり、親しむことができると思います。また、少しでも興味を持って自分の町の文化を学ぶことで、これから絶やさずに文化を受けついでいくことができると思います。

私もこの町の一員として、自分からどんどん文化についてふれたり学んだりして、文化を支え、みんなにも文化のよさや大切さを広めたりして、この町の文化を絶えないものにしていきます。

講 評

審査委員長 高野 保夫（伊達市教育委員）

伊達市の市民憲章作文コンクールの今年度の課題は、「きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を」というものでした。今年もまた市内の各小・中学校の協力のもと多数の作品が寄せられ、その中から学校推薦のあった四十一名の作品が最終審査に残りました。三名の委員により選考が行われた結果、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作の各賞が決まり、合わせて二十二名の皆さんが見事に受賞されました。

＊

最優秀賞に輝いたのは、保原小五年ダッフィー佐藤エイデン志恩さんの「受けつぐ文化」と霊山中三年須田玲菜さんの「学習を学習へ」の二つの作品でした。ダッフィー佐藤さんの作文は、地元につながる太鼓祭りへの参加体験をもとに、伝統的行事に対する日本とアメリカとの文化の違いを考えたところに新しさがありました。また、中学生の須田さんの文章は、読書の体験や地域の人々との会話から「勉強」についての考え方を見つめ直し、楽しく学ぶ大切さを読み手に訴えかけたものです。

優秀賞は四人の作品です。小学生部門は、掛田小五年佐藤茉波さんの「生涯読書」と掛田小六年小林はるのさんの「みんな、天蚕っ

て知ってる？」の二作品。佐藤さんは「読書は心の栄養」をキーワードに、家族へのインタビューをもとに読書の豊かさについて、小林さんは祖母と特産品の天蚕との関わりを通し、天蚕の商品化や伝統文化の継承の問題について考えをまとめました。

中学生部門は、月舘学園中二年齋藤りおんさんの「月舘町と未来を背負う私たち」と梁川中三年橋内優菜さんの「恵まれた町の中で」という二作品。齋藤さんは小中一貫校となった月舘学園の良さを紹介し、地元の将来や若い世代の役割について考え、橋内さんは梁川小での学びやきらめき事業の中で感じた伊達市の教育環境、生涯学習への希望、期待を述べています。

優良賞は八人の作品です。小学生部門は、伊達小五年遠藤和奏さんの「図書館へ行こう」、伊達小六年宍戸美香さんの「歴史をつなぐ」、梁川小五年岡崎心優さんの「梁川城への思い」、梁川小六年遠藤蒼依さんの「読書を通して心を豊かに」の四作品。二人の遠藤さんは読書の視点からテーマに迫りました。学ぶ心と豊かな文化の問題を図書館での読書体験を通して考えたのは遠藤（和）さん。学校図書館での楽しい読書活動や昔話との出会いの中で読書の大切さについて考えたのは遠藤（蒼）さん。宍戸さんは祭りに焦点を当て地域文化の継承について、岡崎さんは梁川城址への思いや伊達市の観光のあり方について考えを深めました。

一方、中学生部門は、霊山中一年三浦天寧さんの「町の文化を広めるために」、月舘学園中一年熊坂栄那さんの「今をつないだ過去

と未来」、月舘学園中三年笹原琉愛さんの「私達が受け継ぐ」、伊達中三年八巻愛香さんの「音楽を楽しみ、音楽でつながる」の四作品。三浦さんは霊山太鼓に絞って伝統行事や文化の広め方について、笹原さんは地元の牡丹獅子に話題を絞り、伝統文化の継承について考えています。東日本大震災の避難生活の体験や地元に戻った父の活動を通して地域の過去や未来のことを考えたのは熊坂さん。八巻さんは中止になったきらめき事業の文化的意義を問い、将来も音楽活動を続けたいという決意を述べました。

佳作は八人の作品です。小学生部門は、小国小六年狗飼梨央さんの「地域の伝統を守る活動を」、堰本小五年橋太一さんの「未来へ向けて学ぶこと」、上保原小六年渡辺友悠さんの「身近な伊達を学ぼう」、月舘学園小六年高木梨央南さんの「学びあう町に」の四作品。狗飼さんは霊山太鼓に対する地域での取り組み、橋さんは自然環境の保全と農業との関わり、渡辺さんはあんば柿や東根堰の視点から伊達市の魅力、高木さんは地域の学習環境や人間関係などに注目して文章をまとめています。

中学生部門は、桃陵中三年齋藤彩音さんの「私達で築く新しい伊達市」、松陽中三年遠藤蒼斗さんの「昔からの文化」、桃陵中二年引地美乃梨さんの「未来へ繋ぐ『文化』と『絆』」、梁川中一年佐藤百夏さんの「文化を大切に」という四作品。齋藤さんは「健幸都市」の取り組みを、遠藤さんは伊達市の祭りや歴史などの視点に着目し、引地さんは合唱部の経験をもとに文化や絆のことを、佐藤さんは養

蚕を通して地域の産業文化の継承の問題についてそれぞれ考えを深めました。

*

次年度は市民憲章の第五文「めざしましょうすこやかで活力のあるまちを」が課題になります。実際に見聞きしたことや体験したことなどをもとに、話題の中心を明確にし、読み手に訴える表現も工夫しながら考えをまとめてほしいと思います。来年も皆さんの積極的な応募を期待しています。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを



市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達織りなす未来ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立つて行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
令和3年3月